

「六郷を探る会」資料集

六郷市民センター発行

二〇〇〇年

平成 12 年度 地域活性化推進事業

「六郷を探る会」

六郷の地はかなり古く、八世紀の初めには集落が形成されていたことが古文書等で確認できる。二木周辺は六郷地域の歴史の発祥地とも云われ、「井土」の地名も王朝時代に、既に使われていた。

明治 22 年、町村制施行により「旧六郷村」が誕生、現在は新しい住宅地も増え、昔の暮らしの名残をとどめながらも、地域に住む人々の生活は変化の一途をみせている。また歴史的に古いお寺、史蹟が六郷地域には多く残存している。

人はだれでも、自分たちが暮らす土地や地域を知りたいという思いがあるのではないだろうか。それは現在、六郷に住む人たちにも通じる。古くから住む人も新しく住み着いた人も、いつしか同郷の徒として、六郷の土地や地域に親しみ、愛着をもって暮らしているものと考えられる。

そこで、六郷の地域や歴史に興味をもつ人たちの知識や問題意識を視点に「六郷を探る会」を発足させることにした。

古い歴史があるにもかかわらず、地域や市民センターには六郷に関する記録や資料が少ない。地域在住の佐竹清造さんは、六郷の地史やくらしに詳しく、遺跡の発掘や仙台市史編纂の際の調査にもかわり、自らも「県文化財友の会会員」として歴史等に造詣が深い。佐竹さんを学習リーダーとし、六郷をテーマに語り合いながら、土地の記録、土地の記憶を残していくことにした。

この記録集は、「六郷を探る会」参加者のために、5 回にわたって佐竹さんが作成した資料を一つにまとめたものである。

(平成 13 年 3 月)

学習経過

5 / 10 (水) 旧六郷村の沿革

7 / 12 (水) 六郷の地名・居久根

9 / 13 (水) 今泉地区探訪 (行程約 2 キロ)

11 / 8 (水) 上飯田・日辺地区探訪 (行程約 3 キロ)

平成 13 年

1 / 17 (水) 六郷の講・年中行事

3 / 9 (水) 資料集配布とまとめ

目次

1	旧六郷村の沿革	3
2	六郷の地名	9
3	今泉地区探訪	20
4	上飯田・日辺地区探訪	23
5	六郷の講	26
6	六郷の年中行事（旧暦）	27

1 旧六郷村の沿革

旧六郷村は明治 22 年 4 月の町村制施行時に誕生している。

藩政時代以来の旧村、沖野村・飯田村・日辺村・今泉村・二木村・種次村の六カ村と、井土浜、藤塚浜の八つの地区が合併して成立したものである。当時、六郷村は名取郡に属しており、昭和 16 年 9 月に仙台市に合併した。

六郷の地は、かなり古くから集落が形成され発展していた。その中心は飯田で、昔から良田地帯を形成していた。

1.1 村役場

二木地内水神一番地長称寺（ちょうしょうじ）内一民家を借り受けて使用していた約 30 年後の昭和 7 年 8 月 1 日、現在地に移転した。

当時の総工費は 6,000 円也と記されている。

飯田を上飯田・下飯田の 2 区とし、二木をさらに二木・三本塚の 2 区に分け、全村を 10 区として各区に区長を設置、村政の運営を図った。

1.2 地勢

名取郡の北端に位し、東方は太平洋に面し南は名取川に隔て閑上町、中田村に接し、北は宮城郡七郷村に隣し、西は仙台市に境し、東西に長く二里余り南北一里余り平坦地。

1.3 道路

二大工事、郡道の二道路

二大工事は明治 22 年、旧道路を改修して新道と称し、井土浜より仙台市に通ずる道路であった二木、今泉、飯田、沖野に通じた大正 9 年 4 月、郡道に。大正 11 年 12 月から県道になった。

1.4 橋

井土橋、飯田三ツ橋、石橋であった。

1.5 耕地

昭和 7 年 調査判別

田	876 町 3 反歩	畑	270 町 9 反歩	
米	19280 石	麦	9480 石	収入 423,500 円
その他食用農作物収穫合計 670,000 円				

その他養蚕を副業としていた。

1.6 社寺

明治 42 年神社合祀令により、村中の氏神等が村神社に合祀。

藤塚の五柱（ごちゅう）神社、二木日吉神社 指定 2 社

その他、飯田の八幡社、下飯田の薬師如来、日辺の日の宮八幡小学校

1.7 寺院

曹洞宗	4	清涼寺	東禅院	地福寺	昌林寺
真 宗	4	長称寺	徳照寺	祐善寺	海楽寺
真言宗	3	萬蔵寺	薬王寺	高福寺（廃寺）	藤塚
天台宗	1	高福院（廃寺）			

1.8 史蹟

飯田に千体仏（仙台仏） 飯田村萬蔵寺に安置

1.9 小学校

六郷小学校

明治 6 年 6 月 1 日、二木村・種次村・井土浜・藤塚浜を学区として種次小学校とし、種次村東禅院を仮校舎に開設。

教 員	浜田依基	45 才	士族	・ 読書	習字
	尾花芳重	37 才	士族	・ 算術	
児童数	男 135 名	女 51 名	計 186 名		

明治 6 年 7 月 1 日、飯田村満蔵寺を仮校舎にあて、飯田・沖野・日辺・今泉の 4 ケ村を学区とし、飯田小学校として開設。

教 員	沼田 賢蔵	31 才	商人	・ 読書	習字
	佐々木貫治	40 才	農民	・ 算術	
児童数	男 76 名	女 2 名	計 78 名		

明治 13 年 11 月就学生増加により、飯田村 30 番地沼田賢蔵氏の宅地内に校舎を新築。

明治 35 年 12 月 14 日、現在地に新築。

校舎 27 間 2 階建 1 棟 昇降口 2 棟 便所 2 棟 総工費 7,150 円

明治 36 年 1 月 22 日種次分教場設立

明治 45 年

本 校 分 校

学級数 11 3

児童数 646 168 職員数 18 人

大正 8 年、児童収獲のいなごの売上げ金 80 円で綱引き用綱径 1 寸 5 分長さ 30 間購入。

昭和 16 年 4 月、国民学校令により、宮城県名取郡六郷国民学校と称する。

同年 9 月 15 日、仙台市合併。

仙台市六郷国民学校となる。

昭和 22 年 4 月 1 日、種次分教場 東六郷小学校として独立。

〃 46 年 講堂を解体し体育館を新設。児童数 356 名

〃 48 年 創立 100 周年祝賀会

〃 51 年 鉄筋新築第 1 期工事竣工

〃 54 年 〃 第 2 期 〃

平成 5 年 〃 第 3 期 〃

六郷中学校

昭和 22 年 4 月 1 日設立

1.10 遺跡 発掘をした場所

今泉城跡 昭和 54 年 10 月 8 日～12 月 21 日調査

縄文時代～江戸時代の複合遺蹟である建物跡、井土跡、土杭跡、橋脚等検出された。遺物は渥美
常滑 古瀬戸 在地産陶器 唐津中国磁器 かわらかけ 魚貝 茶臼 粉引き 白 硯 下駄
草履 桶 柄杓 箆 箸 漆器 鉄鍋 鏡 古銭 鋏 刀 鎌が出土している。一部は仙台市博物
館に陳列されている。

高田 B 遺跡 平成 3 年 5 月 15 日～ 調査

縄文時代から近世にかけての遺跡

江戸時代の水田跡 室町時代頃の水田跡 建物跡 道路跡 弥生時代の生活用具のすて場 河川
跡が見つかった。

河川跡からは弥生時代の土器や木製農具、古墳時代の建築材などが大量に出土している。

下飯田遺跡 平成 1 年試堀調査

古墳時代から中世にかけての集落跡。古代関東からの移住者の村で、古代の竪穴住居、中世の井
土跡、集落跡、河川跡、中世の屋敷跡、土器、木製品、貝、シジミ、アサリ、貝塚の跡の発見は市

内で初めてである。

中柵遺跡 平成 6 年試掘調査
古墳時代から中世にかけての集落跡。

1.11 駐在所

明治 10 年 二木駐在所設置。
昭和 7 年 飯田駐在所設置。

1.12 交通

昭和 2 年 バス井土浜線開通。

1.13 土木

大正 9 年 4 月 道路掃除令により各集落の受持区域があった。
各受持区域の起終点の路傍に標柱を建て、分担区域を明らかにした。又道路筋に溜砂利場があり、常時砂利を購入し路面の修理用にした。

場所	飯田近尻前	3 坪
	横俵水門脇	3 "
	役場前	3 "
	二木元役場前	3 "
	井土橋脇	3 "

1.14 その他

飯田遠西に米穀受検場があった。

郷倉（ごうそう） 昭和 9 年 12 月 18 日、内務省訓令に依り計画を立て、各区に六坪の本造瓦葺き倉庫一棟づつ建設。恩賜郷倉と称した。

1.15 諸車及小船

昭和 11 年 6 月現在

	荷馬車数	牛車数	荷車数	リヤカ数	自 転 車			小船数
					普通用	通学用	総計	
沖 野	50		6	63	63	2	65	2
日 辺	41		2	30	29	1	30	7
飯 田	36		3	28	37	1	38	4
今 泉	40		-	60	33	2	35	2
下飯田	30		3	12	35	7	42	-
二 木	21		2	21	38	3	41	3
三本塚	34		1	18	44	-	44	-
井 土	23	1	1	18	47	7	54	12
種 次	20		-	24	37	1	38	13
藤 塚	3		-	28	15	2	17	18
計	298	1	18	302	378	26	404	61

1.16 郵便

昭和 10 年 4 月 飯田三橋地内に陸前六郷郵便局取扱所

11 年 12 月 1 日 集配三等郵便局を小学校校地内に村費で設立

市内区

市外区 1 区 2 区

以前は沖野、上飯田、日辺、今泉、下飯田、三本塚、二木地区は長町郵便局から配達

藤塚、種次、井土は閑上郵便局から配達（閑上の渡し）

四郎丸古川地区は陸前中田郵便局から配達（落合の渡しを利用して）

1.17 ラジオ聴取戸数 昭和 11 年 7 月

鉱石ラジオ 14 戸 電気ラジオ 31 戸 計 45 戸

1.18 観音堂 仙台の三十三観音中、六郷地区安置

第 26 番札所 両全院観音堂 日辺田中 1

27 満蔵寺観音堂 飯田上屋敷 19

28 円浄寺観音堂 今泉久保田 31

29	祐善寺観音堂	〃	43
30	高福院観音堂	〃	55

石碑 板碑 記念碑 招魂碑 馬頭観音碑 塚

板碑は、梵字（インド文字）を刻んである石碑で其の人の徳を偲び、後世に建てられたものである。

上飯田三丁目板碑 下飯田薬王寺板碑

古老が伝える六郷の伝説、伝承

六郷の大字小字

堀・沼 六郷堀 中堀 沖野堀 日辺堀 今泉用水路 井土用水路 小牛沼（おごぬま）

平成 12 年 4 月 1 日現在

	世帯数	人 口	男	女
沖 野	4,185	12,051	5,985	6,066
上飯田	2,788	8,202	4,054	4,148
六 郷	225	695	347	348
下飯田	122	498	254	244
今 泉	1,215	3,844	1,888	1,956
二 木	88	372	171	201
三本塚	274	639	280	359
日 辺	178	733	369	364
種 次	107	459	221	238
藤 塚	98	396	198	198
井 土	166	450	216	234
	9,446	28,339	13,983	14,356

2 六郷の地名

2.1 大字小字の歴史

「字」には長い歴史がある。「字」はひとまとまりの田畑を区画する呼び方として、近世検地で定着したことばだという。

小字が幾つか集まって大字となり、大字の集合が村や町になって住民が助け合ったり、協力しあったりするのに都合のよい単位であった。

2.2 ^{イグネ} 居久根（屋敷林）

三、四十年前までは家屋の屋根はカヤぶきで、風が強いとカヤが飛んでしまい補修に苦労したようである。そのために樹木は風に強いスギやケヤキ、ヒノキなどの丈夫で大木になる木が植えられた。それ以前はハンノキがイグネの木としては一般的だったようですがスギなどに比べると、風に弱く台風によってしばしば折れてしまったということである。

それでもイグネは、住まいと暮らしをやさしく包んでくれ、夏は涼しく冬は保温効果もあり、住む人を快適にしてくれた。もちろんイグネは防風雪のためだけではなく、たとえば梅、桃、柿、梨、グミなどの果樹は家族が楽しみにその実りを待つ木でもあった。おやつになったり、梅干しや干柿にしたり、クリやクルミ、イチヨウの実は大切な保存食でもあった。

スギの葉は昔は燃料に欠かせなかった。燃料や食物だけでなく建築材にもなった。同じ六郷でも沖野や飯田にもイグネが多かったが、数は減っている。手入れの負担や火災の心配、建築様式の変化によって防風の必要がなくなったことなどから切る家が多いという。六郷地区としては、日辺、種次に比較的に多く残っている。

2.3 沖野地区

「沖」は陸から遠く離れた海や湖の水面を、「野」は自然の広い平地を意味する。沖野周辺が2500年ほど前に、現海岸線が形成される以前は海面下であったことを考慮すると、「沖野」という地名は原野の広々と遠くまで開けた平地から名はつけられたと思われる。

沖野地区は昭和61年7月7日住居表示が実施された。

沖野一丁目	神柵	新神柵	館西	南小泉三ノ坪	二ノ坪	古城東
二丁目	神柵の一部	新神柵の一部	館西の一部	中柵西の一部	南小泉	六郷堀
三丁目	河原の一部	河原土の一部	河原越の一部	河原中の一部	砂押の一部	
	中柵の一部	中柵西の一部	中柵東の一部	七町の一部		

四丁目 河原の一部 河原中の一部 中河原の一部
 五丁目 河原の一部 河原土の一部 河原中の一部 砂押の一部
 上飯田遠西の一部
 六丁目 横堀 河原越 河原下 館南 中柵の一部 七町の一部
 上飯田遠西の一部 南小泉五ツ谷二番 南小泉御休場南
 七丁目 北門 館 館西の一部 館南の一部 中柵の一部 中柵東の一部
 南小泉御休場南の一部 南小泉中河原 南小泉広瀬川橋下

清涼寺 和算家の墓 関流丹野清晴 吉田流丹野村清
 沖野館跡城主栗野大膳

旧家の屋号称号

高野^{こうや} 北高野^{きたこうや} 中館 遠西 沢田 砂押 北門
 無尻橋 要害

2.4 飯田地区（上飯田 下飯田）

飯は普通、米、粟をさしている。飯田は米を作る水田でだいたい田所を指していると思われる。上飯田は下飯田とともにこの地方において良田地帯であり、明治前半までは飯田であったが、地域が東西に長いと下飯田に行政分けしたのである。

飯田字大町	31 戸	飯田字遠谷地	30 戸
上屋敷	139 戸	戸田	
河原		中橋	49 戸
高田	3 戸	屋敷	63 戸
天神橋		屋敷北	6 戸
樋		横町	1 戸
遠西	149 戸		
土手下	1 戸		
土手畑			
山木	40 戸		
横堀	28 戸		

上飯田地区、下飯田地区の一部は平成 6 年 7 月 6 日住居表示された。尚市街化調整区域は住居表示の対象にならない。

満蔵寺 飯田八幡神社 飯田三橋道端石碑
 ルーズベルト大統領夫人のお手植えの松 記念碑 薬王寺 薬師堂

旧家の屋号称号

水城 角の家 中の家 遠西 近^{ちかじり}尻 遠下 イケス ダンボ

^{みずしろ}水城 上飯田の小字で水城は水牢が転化したものである。これは仙台領内において罪科を犯す者があった時、この水牢に入れまた罪人と疑われし者を拷問するために使われたところである。

2.5 日辺地区

日辺は広瀬川、名取川の合流点の北側にある。ここに日野宮八幡が祀られており、この日野宮がなまって日辺になったとか、あるいは日野宮の辺にあるので日辺とよんだとも言われている。

日辺の小字名

(平成2年10月1日住民台帳の数字)

敷地田	シキチタ	
朱来	シュライ	
新田	シンデン	
千刈田	センガリタ	3戸
高田	タカダ	91戸
高原	タカハラ	
宅所	タクショ	
宅所下	タクショシタ	
宅地	タクチ	171戸
田中	タナカ	11戸
土手合	ドテアイ	
西河原	ニシカワラ	
畑田	ハタダ	16戸
林前	ハヤシマイ	
前河原	マエカワラ	
前田	マイダ	5戸
荒屋敷	アラヤシキ	3戸
大久保	オオクボ	
沖田	オキタ	3戸
沖田東	オキタヒガシ	7戸
落合道	オチアイミチ	
五畝	ゴセ	
五郎屋敷	ゴロウヤシキ	8戸
沢目	サワメ	1戸

宅地囲地内真宗大谷派光明山徳照寺がある。

寺内に、天保4年、天明3,4年等餓死者に対する50回忌を祈る無縁墓の碑、天保7年死亡のため供養する有無縁の墳墓碑がある。

針生林蔵の墓

天明天保の飢饉の際、私財を投じて難民救済に当たった義人針生林蔵の墓がある。

水害に備えての吊し舟、餓死囲い

旧家には軒下に万一に備えて舟を吊していた。

炉端のその上に古ぼけた二俵、二ヶ所から縄で支え天井から下がっていた。この俵はガスガコイと云って床板に下ろすことを禁じられていた。中に普通、米麦、外に粟稗の糧食が入っていた。

旧家の屋号称号

舞名 遠上(トツカミ) シンヤ 遠東 中の家 角地

宅地囲屋号遠東の針生作男さん宅には「日辺のお門松」という昔話がある。

むかしお正月も近いある日のこと、日辺の弥右工門(やえもん)さんが枝ぶりのいい松をとってきて立派な門松をたてた。お正月が終わった一月十五日の朝、門松を苗代の鳥おどしにするために地面にずっくりさすと、松は枯れもせずしっかりと根付いたと。そして秋になるとうるさいすずめどもを追っ払い、たくさんの稲を実らせた。

「これはなんと不思議な松だ」弥右工門さんは自分の家の敷地内にある日の宮八幡のそばに松を植えかえた。

それから弥右工門さんの家では「おらいのうちでは門松があっから」といってお正月には門松をたてないことにしたんだと。そしてその松をお門松と呼び大事にしてきたと。

いま弥右工門さんの子孫の針生作男さんの家では、40センチほどのめんこい松を四畳半ほどの広さの赤い玉垣でかこい、だいじに祀っている。これは三代目のお門松で、昭和59年12月に植えたものだが、それまであった二代目のお門松は太さがひとかかえ半、高さが30メートルほどもあったと。そして3キロくらい離れた向こう岸の四郎丸あたりからも見えていたが、枯れてきたのでついに59年12月13日に切ってしまったと。年輪を数えてみると四百年ほどにもなっていたと。

針生さんの家では、代々お門松に毎朝ご飯をあげているが、お正月には朝晩お雑煮だのあんこ餅だの魚だの黒豆だのをあげ、夜にはお神酒もあげているんだと。そしてそのお神酒を松の根もとにかけて必ず松の木に飲ませてくるんだと。

2.6 今泉地区

昔、今泉字圀の田の中にどこからともなく観音像が飛来し、その地点から泉が湧いたというのである。信仰厚い村人はここに観音堂を建てたが、その御詠歌の一部「今泉わきて流るる」が地名の起こりと言われる。又ここに今泉城があったがそれは今の祐善寺の地であり、発掘調査も行われた。

今泉には下記の小字があった。

戸数は平成 5 年 10 月 1 日調査（住民基本台帳による）

今泉字飯田前	イイダマイ	218 戸
石井田	イシイダ	2 戸
上新田	カミシンデン	1 戸
北 田	キタダ	10 戸
久保田	クボタ	205 戸
久保田東	クボタヒガシ	86 戸
小存家	コザケ	32 戸
小存家東	コザケヒガシ	16 戸
小存家前	コザケマイ	10 戸
宿	シュク	9 戸
新田東	シンデンヒガシ	
築 道	ツキミチ	9 戸
築道南	ツキミチミナミ	40 戸
寺 田	テラダ	1 戸
土手外	ドテソト	3 戸
中 上	ナカガミ	10 戸
前 田	マイダ	5 戸
門 暮	モンクレ	354 戸
中村宅地	ナカムラタクチ	14 戸
中村東	ナカムラヒガシ	1 戸
畑 中	ハタナカ	7 戸
二木西	フタキニシ	
古 川	フルカワ	30 戸
楓	ハヌキ	5 戸
鹿子穴	シシアナ	4 戸

楓地内大友一さん宅には居久根が現存している。又近く、梅塚（先祖は鎌倉時代の今泉城主須田玄蕃に仕え伊達公に滅ぼされ、帰農の際武具や貴重品一切を埋め、塚を造り梅の木を植えたので「梅塚」と言われている。）

鹿子穴圀に焼桜というところがあり、伝染病や水災害での死亡者の火葬場があった。その跡に根元が焼けたような桜が耕地整理の時まであった。

旧家の家号称号

楓 久保田 リンカ シンヤ 街道端 南の家 北の家 宿の家 遠東 遠西

2.7 二木地区

寛永9年（1632）の長称寺の記録によると水神圀に居を構えた武田信玄の家臣二木の姓に由来すると言われている。

二木字水神	ミズカミ	11 戸
山神	ヤマカミ	3 戸
笠神	カサカミ	32 戸
山王	サンノウ	17 戸
大口	オオクチ	
新原	シンバラ	2 戸
野中	ノナカ	1 戸
広町	ヒロマチ	2 戸
二木前	フタキマイ	
二又	フタマタ	14 戸

水神地内に六郷地区では最も古い長称寺がある

弘治元年（1555）玄長和尚の開山による浄土宗水住山長称寺現住職は、38 代目。

旧家の屋号

田中家 館の腰 原

2.8 三本塚地区

二木村であったが、南部二木、北部が三本塚に分かれた。三本塚の地名は鶴塚、亀塚、朝日塚の三塚（古墳）から由来したと云われる。

二木字赤沼下	アカヌマシタ	6 戸
井土堀	イドホリ	4 戸
上荒谷	カミコウヤ	
北中谷地	キタナカヤチ	7 戸
荒 谷	コウヤ	12 戸
荒谷西	コウヤニシ	1 戸
権家下	ゴンケシタ	1 戸
境 堀	サカイボリ	12 戸
中谷地	ナカヤチ	19 戸
沼屋敷浦	ヌマヤシキウラ	4 戸
原	ハラ	
深谷地	フカヤチ	2 戸
潮入	シオイリ	
赤沼西	アカヌマニシ	
赤沼東	アカヌマヒガシ	
下新田	シモシンデン	
中潮入	ナカシオイリ	
中条浦	ナカジョウウラ	
道下	ミチシタ	

昌林寺

境堀にあって曹洞宗で茂葉山と号する。亀塚跡耕地整理後、三本塚公会堂敷地内に移転された。

旧家の屋号称号

赤沼 荒谷 沼屋敷 原前 中条 長屋敷 水門 山路

2.9 種次地区

仙台藩直轄の蔵入地が多く、種作の粳を産したのでこの名があると伝えられている。

種次字市兵工	イチベイ	13 戸
川前	カワマイ	
沢目	サワメ	3 戸
山王前	サンノウマイ	
新南	シンナン	
高原	タカハラ	5 戸
竹ノ花	タケノハナ	23 戸
寺西	テラニシ	7 戸
道元	ドウゲン	15 戸
中斉	ナカサイ	3 戸
中野	ナカノ	15 戸
中野東	ナカノヒガシ	3 戸
中野町	ナカノマチ	3 戸
中屋敷	ナカヤシキ	7 戸
沼田	ヌマタ	
番古	バンコ	2 戸
東番古	ヒガシバンコ	1 戸
南番古	ミナミバンコ	2 戸

種次字山王前に東六郷小学校がある。昭和 32 年 4 月にそれまでは六郷小学校種次分校であったが、独立開校した。

旧家の屋号称号

道元 南の家 如来堂 中条 中の家 正伝 大条

2.10 藤塚地区

昔、閑上浜に橋浦師茂左工門という者がいた。

ある時、浜辺に流れついた筏を見つけた。その筏に光を放っている神体らしきものがあつたので、ご不浄になってはならないと、これをお祭りしたのが今の湊明神社である。

残った藤筏は川の対岸の中島浜に埋めて塚を築いたところ、ここで根が生え芽が出て、藤木が生長したので、これ以来中島浜を藤塚浜と呼ぶようになったと云う。

この塚の近く、五柱神社が鎮座している云い伝えとしては、この藤の筏に乗ってきたのが五柱の神であつたとか、ここに茂る藤木は普通のものと異なり、みな左巻きで松の大樹にからみつき上へ上へ伸びている。

藤塚字一本松	イッポンマツ	4 戸
牛道下	ウシミチシタ	30 戸
上	カミ	
上川原	カミカワハラ	
上南	カミミナミ	
三十刈	サンジュウガリ	
下川原	シモカワハラ	
土手外	ドテソト	
中道下	ナカミチシタ	
沼田	ヌマタ	1 戸
東谷地	ヒガシヤチ	3 戸
松の西	マツノニシ	10 戸
屋敷	ヤシキ	50 戸

塩田跡 藤塚常磐の墓 金龍山高福寺の跡

旧家の屋号称号

一本松 中宿 蒲田 御殿 お役所

2.11 井土浜地区

この井土浜は王朝時代には既に井土という名が現われてくる。従来六郷の中井土はイドハマでなく、土は上の訛りであり、高館村の一部（飛地）であったという説もあるが、いずれにしても古文書等に現われてくる井土浜は、「いどはま」と呼称されていることからこれが正しい読み方と云われている。

井土字井土浦	イドウラ	
大野	オオノ	
大分	オオワケ	4 戸
小牛沼	オゴヌマ	
小牛沼向	オゴヌマムカイ	
開発	カイハツ	
北浦	キタウラ	
須賀	スガ	
砂崩	スナクズレ	1 戸
宅地	タクチ	
大夫野	ダユウノ	
樋口	トヨクチ	
二郷堀	ニゴウボリ	
西浦	ニシウラ	2 戸
沼田	ヌマタ	2 戸
沼田向山	ヌマタムカイヤマ	
沼向	ヌマムカイ	
東浦	ヒガシウラ	8 戸
南浦	ミナミウラ	16 戸
山ノ後	ヤマノウシロ	6 戸

海楽寺

真宗大谷派、元禄 15 年（江戸中期）（1702）正受庵と号している。

砂鉄集積所跡、ダイコウ船着き場、丹野家仙台指定樹木、兄弟這い松三浦家

山の後囲は山守り（官林の管理人）の 1 戸だけだった。松林を少し入ったところに、八坂神社、更に東に貞山堀の渡しの跡があり、北に仙台乗馬クラブその南方に砂崩の井土浦川の排水機関場がある。

焼浜

井土浜松林内にある地名で、従来は死体焼き場であった。水災害での死亡者又は伝染による死亡者を当地で焼いたところで、ここを焼浜と言っている。

小牛沼

井土浜集落民の共有地であったが、戦後仙台市が買収ゴミの埋め立て、現在は来年（2001 年）開かれる国体の馬術会場に造成している。

旧家の屋号称号

ガニマチ 門前 ダイコウ 中の家 遠西 遠北 新宅

2.12 古川（飛地）

陸前国名取郡四郎丸村（明治 11～20 年作成）によって古川の地は川をはさんで、四郎丸固有の村地でこの時はすでに低護岸が造られていたことがわかる。

地図に記載されている低護岸は明治初年に造られた。

昭和 22 年（1947）のカスリン台風、23 年の洪水で破壊され、補強を重ね現在の高位堤防が完成されている。往時の居住者 7 戸、現在 30 戸をこえている。土地籍は中田四郎丸であるが住民は今泉地区の町内会員として生活している。

古川が行政的に六郷支所に属したのは昭和 62 年 1 月 6 日である。

3 今泉地区探訪

～行程約 2 キロ・2 時間～

案内と資料：佐竹清造

(平成 12 年 9 月 13 日)

1. 梅 塚
2. 楓大友家のイグネ
3. 二十八番札所円浄寺観音堂
4. 二十九番札所祐善寺観音堂
5. 三十番札所高福院観音堂

3.1 梅 塚

旧今泉字地内（現在今泉一丁目）にあり、大友さん所有。先祖は鎌倉時代の今泉城主須田玄蕃に仕え、伊達公に滅ぼされ帰農の際、武具や貴重品一切を埋め、塚を造り梅の木を植えたので梅塚、又一説には物を埋めたので、埋塚とも言う。代々ここを掘り起こすと腹痛みをすると伝えられている。

3.2 楓大友一さん宅のイグネ

農家の暮らしの原点ともいべきイグネを昔のまま残している大友家は、一さんで 21、22 代目というから仙台が誕生する以前から、ここに居久根は茂っていたのかもしれないと、当主の一さんが言っておられる広い屋敷。それをコの字型に樹木がとりかこみ、とくに北西に分厚い杉林で固めている。

大友さんのイグネの樹木

ハンの木 クリ ケヤキ カキ ウメ サクラ サンショウ ヒイラギ ユズ タラの木 クルミ
ミ モミジ カヤ ヤナギ アオキ ウメモドキ ボケ イチジク シュロ

イグネの中の機能

水系 境堀 カド 井戸

家屋 母屋 馬小屋（機械小屋） アク小屋 ヌカ小屋 木小屋

作業小屋 木倉（キッツ） 使用人小屋 味噌小屋 漬物小屋

風呂 便所

畑 苗床 野菜畑 たい肥（ワラニオ）

その他 庭 氏神 墓地

3.3 第二十八番札所円浄寺観堂

もと須田玄蕃館（今泉城跡）あとに寺跡はある。

最初は天台宗修験の寺で元龜二年（1571）に三知法印の開山と伝える。しかし明治になって廃寺になり、寺小路の円光寺に統合されて観音堂だけが残され、聖観音が祀られている。

元熊野神社にあったという鰐口（わにぐち）が観音堂に残っているが、次のように記されている。

現在、仙台三十三観音をまつる寺院あるいは堂宇の門前に、仙台〇〇番観世音と記した石柱が立っている。これは昭和11年12月に仙台大町四丁目の茶舗よろづ園主人の一力友助氏が私財を投じて建立したものである。

筆は輪王寺の福定無外（ふくさだむがい）和尚で、北山に住む石工の庄子栄之助が刻立したことが、裏面に記されている。

奉納 熊野山大権現 天明五乙巳年九月十九日

名取郡北方今泉村

肝入願主 柴崎又十郎

願主同村 長右衛門同惣村中

洛工北目町住大出和四郎洛貝

天明五年 鰐口 仙台市今泉円浄寺

宮城県の金石文

径一尺二寸

菊地武一著参照

3.4 第二十九番札所祐善寺観音堂

浄土真宗本願寺派の寺で、元和三年（1617）に立花祐西によって開基されたと伝えられる。藩政時代には二度の大火にあい、また宗派も本願寺派から大谷派にかわるなど変遷も多岐にわたっている。仙台南部にあっては数少ない浄土真宗の寺であるここは、須田玄蕃の館にあったものが祐善寺に移ったものであり、山門を入れて左手に観音堂はある。十一面観音を安置してあり鎌倉時代の作と伝えられている。この祐善寺を中心に六郷地区に五観音札所があるのはこの地域の人々の信仰心を物語っているようだ。

斎藤俊平之碑

今泉村に居住した儒医で、文化四年（1807）～明治十五年（1882）の人で医術のかたわら今泉村、日辺村の子弟を教育し、門人その数千人余りに達している、今泉祐善寺内に同氏の碑文あり。

明治 17 年 9 月 仙台木村敏撰 佐々木舜篆並書

旧六郷村初代村長の墓

墓碑銘

明治 23 年 5 月 友人
大久保博謹撰
好山松本唯一書

就職年月日 明治 22 年 4 月 23 日

退職年月日 明治 23 年 1 月 19 日

摘要 死亡

住所 今泉十一番地

氏名 佐藤謙之助

生年月日 嘉永 3 年 5 月 1 日

3.5 第三十番札所高福院観音堂

仙台巡礼 33 札所中 30 番札所観音を祀っている今泉須田玄蕃館天台宗高福院は今は廃寺となつて、寺跡もあきらかではない。往古今泉集落の東方、現在の今泉字圀の田の中に観音が飛来し、そこに泉が湧いたので今も尚「観音田」という名が残っている観音堂は、観音田の所有者の遠藤崇氏屋敷内に祀ってあり、本尊は聖徳太子作と伝える正観音であり

御諏歌に 「いにしへも さどなありけん 今泉 わきて

流るる末が末まで」とあり今泉の地名の起因とも言われている。

遠藤家では、毎年観音田に糯米を作り、旧 12 月 17 日に餅をついて観音に供するのを家例としている。

4 上飯田・日辺地区探訪

～行程約 3 キロ 2.5 時間～

案内と資料作成：佐竹清造

(平成 12 年 11 月 8 日)

1. 満蔵寺
2. 飯田八幡神社
3. 両全院観音堂
4. 徳照寺
5. 板碑

4.1 満蔵寺

真言宗不動明王を本尊とし、千手山と号する武州弥勒寺の末寺で、延宝 6 年(1678)宝鑑院円鑑坊の開山にかかるという。

明治 6 年小学校開設の際には、同寺建物を仮校舎に充て、飯田、沖野、日辺、今泉を学区とし、第七大学区第三中学区第三十六番飯田小学校と称した。その後、荒廃無住となったことがある。藩政時代、二回火災にあっている为由緒等は詳らかでない。同寺内には千手観音堂地蔵堂がある。

千手観音堂

地蔵堂境内山門を入って右側に、仙台巡礼三十三札所中の二十七番千手観音を本尊とする観音堂が建っている満蔵寺は、その別当寺で御詠歌に「ゆたかにて人も飯田やかずかずのほとけの宝蔵に満つれば」とある。

慶長年間、伊達政宗の仙台築城にあたり、青葉山鏡ヶ池の辺に祀られてあった千体地蔵尊を他に移したが、その一部を飯田地区に残し堂を建ててこれを祀っていた所を「千体屋敷」と呼んでいる。明治の初年、この地域を買い入れた某が隣地の満蔵寺境内御堂共遷座したのが、現在のお堂で千手観音とともに同座安置されている。

山田甚助領徳碑 元村長 県会議員

4.2 飯田八幡神社

寛治年中（1087～1093）源義家奥州征伐の時、此の地を討平し、日辺に祠を設けてこれを祀ったと伝えられている。応神天皇の乗馬像で、閻浮檀金を以って造ったもので、その後慶長五年（1600）飯田の人渡辺藤四郎が今の地に社殿を建てて現在に及んでいるという。

集落民は産土神として厚くこれを信仰している。

社殿右側に神輿殿、弁天社、左側に湯殿山雷神、庚申等数基の碑が立っている。

三橋二十三夜塔（道標）

六郷にはこうした道しるべ石が現在、一基確認されている。たび重なる道路や甬場の改修でもともと建っていた場所とちがっている。

4.3 両全院観音堂

日辺字田中

仙台巡礼三十三札所中第二十六番札所観音で、天台宗に属している。本尊は正観音で本木観音といわれ、御詠歌に「見ても知れ つもりし罪は あさ日かげ てらすほとりの 雪のきゆるを」とある。古昔本木山観音寺と称し、修験者両全院祥範の再興にかかり、以来その子孫が相継いで別当を勤めていた。

大番士茂木家伝にこの本尊は茂木家の先祖が安置したもので、故にこれを茂木観音といったのを役人が誤って根本（モトキ）といったというが、その何れが真であるかは明らかでない。堂宇は壮麗を極めていたが明治十五年十一月、鳥有に帰し以来三十年仮堂であったのを明治四十五年日吉神社の本殿をここに移して僅かに面目を保つに至った。両全院は今廃寺となり観音堂のみが残っている。

脇に八坂神社、石碑等が数基建っている。

4.4 徳照寺

真宗大谷派に属し、新寺小路正楽寺の旧跡で光明山と号する。

正楽寺開基明慶法印、名取郡笠島福泉坊にいて藩祖伊達政宗の帰依により、日辺北原村に寺地を賜ってこれに移ったのが今の徳照寺の地。仙台領中における真宗最初の寺院であるというので慶長十二年（1606）三月九日真正極楽寺と称し且つ三貫文の禄を寄付されたが明度辞してこれを受けな

かったという。

正楽寺はその後新寺小路の地を賜って移り、その跡地に徳照寺が開山された。開山円寿上人寺号許可は「寛文四年（1664）七月二十四日」本尊阿弥陀如来の下付は「延宝五年（1677）二月十五日」と寺記に記されているので、封内風土記の「寛永年中の開山」は訂正されるべきである。

什宝は親鸞上人、聖徳太子、七高僧の掛軸各一幅

天明、天保飢饉供養塔

山門内左右に二基の石塔がある。右側のは天保飢饉のさいの供養塔で「甲酉兩歳（天保七、八年）死亡者為供養」とあり、天保九年九世秀教和尚の代に日辺の若者組で立てたもの。左側のは、針生屋権十郎（仙台河原町の富商）が天明飢饉の死者のためにその五十回忌に建てたものである。

針生林蔵の墓

徳照寺墓地に天明天保の飢饉の際、私財を投じて難民救済に当たった義人の墓。緑化運動の先覚者で城下の土屋敷に、杉、桐、桑の苗木三万本余りを植え付けたという。杜の都仙台的緑化によせた功も大きかったと言えよう。

（宮城県寺院大総覧より）

4.5 板碑

板碑とは石で造られた供養のための石塔である。板碑は全国的にみられ、北は北海道から南は鹿児島県まで分布している。平たい石の表面だけを使っており、上のほうに仏を表す梵字を薬研彫りという技法で表し、その下にそれを立てた年号や誰の供養のために立てたものなのかという文を刻んでいる。

宮城県では約 5 千基の板碑が見つまっている。この数は埼玉県の約 2 万基、東京都の約 8 千基について全国第 3 位の多さである。仙台市内ではこれまでに約 400 基の板碑が見つまっている。集中しているのは柳生、郡山や東光寺を中心とした岩切の周辺である。六郷地区では 2 ケ所確認されている。若林区内には、22 基がある。

上飯田三丁目 板碑

飯田字屋敷薬王寺板碑

未確認板碑 沖野七丁目（沖野字館） 3 基

” （沖野館跡） 1 基

今泉遺跡出土板碑 （今泉二丁目）1 基

5 六郷の講

村の生活では例えば結婚式や葬式などの冠婚葬祭、火事などの災害、田植えや稲刈、屋根葺き作業などいざという時にはみんなで助けていく必要がありました。そんなとき六郷の人たちは昔から「講」という集団をつくり、資金を集めたり、作業を手伝ったりして協力してきました。

それは寄り合いのような役目も果たし、村の運営には欠かせないものでした。また仲間同志の楽しい付き合いの場でもありました。

このような「講」の集まりは形を変えながら今でも多くの地区で行われています。

5.1 社会的講

契約講

現在の町内会の前身で、戸主会とも云った。各地区にあった。毎年旧暦二月十日、十月十日に講を開いて、集落内の生産事業や土木事業など、一年間の行事を決めました。議員を三つに分け、一番組、二番組、三番組とし、順番に当番（手方役）の組を決め、昼は餅、夜はご飯で手方役は前もって米集め（手方役）はうる米一升、手方役以外の二つの組はもち米一升から準備を済ませる。手方役以外の二つの組はお客分となってご馳走を受けた。（注 今泉集落の場合）けれども都市化が進み、農家が減ってきたので昭和五十年にこの制度は廃止された。

5.2 経済的講

頼母子講

議員が年末に金を出し合い、抽選で講五～六名に低利（年五分）で貸し付けていました。お金を借りた人は翌年の総会に返済しました。

5.3 信仰的講

古峯講 三山講 権現講 山の神講 観音講 不動講

5.4 其の他の講

八幡講 八坂講 天王講 薬師講 山王講

祭典等の維持団体である。

6 六郷の年中行事（旧暦）

かつて六郷には農業を中心にした暮らしがあった。自然の移り変りに支配され、労働は厳しいがその分収穫の喜びは大きい。農作業の節目にはどっさりと餅をつき、神仏に感謝をささげ、時には羽目をはずし、村中で祭りを楽しんだ。苦も楽も分け合う暮らしがあり、たくさんの行事が彩りを添えていた。

6.1 正月

元朝参り（ガンチョウマイリ）

一日の早朝、家の長（父親）が「若水取り」といって井戸水を汲み、家族全員が身を清め、羽織袴の正装、下ろしの足袋に下駄を履き、揃って近郷の神社に参拝した。

七草（ナナクサ）

春の七草、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。六日の夕刻から翌朝にかけて七叩きを七度繰り返し、七回包丁で細かくきざみ、粥に入れて朝食にした。

農始立（ノハダテ）

十一日。一年の農作業は朝仕事のワラ工品作りから始まる。十一日の早朝、他家に遅れるとその年の仕事が遅れるとして暗いうちに起きて、臼の裏を台にワラ打ちの槌を打ち付け、辺りに槌音を高々ととびかせた。

女の年とり（オンナノトシトリ）

十四日を女の年取りといい改めて餅をつき、親指大の団子にしてミズ木の枝につけてかまどの上などに取り付けた。この飾り餅は六月一日の歯応餅祝（ハガダメ）の日まで飾られ、その後は煎って食べた。夕食は台所の労に感謝をあらわして（男衆）が準備する習わしであった。

チャセゴ

十四日の夕食後、子供たちが、五～六人の集団をつくり、家々をまわる。「アヂの方からチャセゴに来ました」と戸口で叫ぶと、家人が「アヂってどっちの方だ」などとちょっと意地悪く問う。答えはなくとも正月用の切り餅二つをくれる。ただし厄年（十九才）の女子は手ぬぐいで顔を隠し、水引を付けた柄杓を戸口からそっと差し出す。そういうときは誰かと問うことなく柄杓に餅を入れてやる。

鳥追い（トリオイ）

十五日の零時を期してお正月様（正月飾りなど）を自宅敷地内のご神木に巻きつけて奉納する。これに先立ちご神木に宿寝している鳥を追い払った。「ヤーヘーヤーヘーホーイホーイ」などと各家に代々伝わる節回しで唱えながら、屋敷内を一周する。

なおこのかけ声は鳥追いの夜以外は口にしてはならないとされた。

あかつき粥（アカツキガユ）

十四日の夜、あかつき粥を入れてつくる。夜中の零時ご神木のお正月様に少量を塗り付けてお供えした後、家族揃って食べた。この粥を男衆が作るよう定めていた。

小正月（コショウガツ）

明けて十五日は小正月または女の正月といい、休日朝餅を食べた。

暁参り（アカツキマイリ）

十五日、特に若者たちは暁（夜明け）を期して同行者を集め、塩釜神社や竹駒神社など遠くの有名神社へ歩いてお参りした。その後は仲間同志で一日楽しく過ごした。

6.2 二月

節分（セツブン）

三日は農作業作物の生産を左右する季節の期日である。煎った大豆を舂に入れ、神棚に供えた後「福は内鬼は外」と声を発しながら屋内各部屋を歩いた。これを拾って自分の年だけ食べると健康になるとの言い伝えがある。（八十のばあさんは大変なこと）

立春（リッシュン）

四日。この日よりこよみの上で春に入る。季節ごとに立夏、立秋、立冬とあり、その十八日までを土用と呼ぶ。

6.3 三月

おひな節句（オヒナセック）

三日。休日。全般的に餅草（蓬の若葉）を混ぜ合わせてつき上げた草餅を食べるだけのものだった。

雛飾りは旧家であっても少なかった。

山伐り（ヤマギリ）

旧暦の松明け、新暦でいうと二月頃まだ雪もあって寒いときだった。「通い山」は近くの山（青葉山、八木山、金剛沢）へ家から毎日通って伐った。「泊まり山」は一ヵ月くらい泊まって共同で伐った。場所は茂庭、折立、綱木、愛子、芋沢。大きい農家とか山持ちとかの作業小屋みたいなどころを一ヶ月位借り、設営して布団、食べ物とかを全部持って行って、大体十人位で自炊した。太い木は「長木」、十三尺位に。枝とか灌木は柴木といって、束ねて直径一人二、三寸長さ、五、六尺位にまとめた。

「背負い出し」には半月位かかった。馬車がつく道路まで背負って運んだ。道路に向かって下がる「下げ山」は楽だが、道路が上の方にある「上げ山」は重労働だった。馬車で家まで運ぶのに十日から半日位かかった。山伐りが終われば、泊まり山なら小屋に山の人達をよんでご馳走した。通い山のときは地元で金品の清算を兼ねながらお祝いをやった。山伐りがご縁で結婚もあった。

6.4 四月

お釈迦様（オシャカサマ）

八日。休日。お釈迦様が生まれた日といっておはぎを食べた。

春祭り（ハルマツリ）

十五日は村社、沖野八幡神社、上飯田八幡神社、二木日吉神社、藤塚五柱神社の祭日で御輿渡御が行なわれた。小学校ではこれに併せて参拝し、その後は休校となるのが習わしだった。それ以前は各集落の氏神ごとに祭り日が異なっていた。仙台合併は春祭りに限り、この日に統一された。

6.5 五月

端午の節句（タンゴノセック）

五日菖蒲の節句ともいう。休日、菖蒲と蓬を組み合わせたものを三組建物の軒先に挿した。（魔除けと言い伝えられている）また菖蒲を浴槽に浮かべて薬湯として入った。男子の成長を願う鯉のぼりは一部旧家などで見受けられる程度であった。

6.6 六月

歯固め（ハガタメノツイタチ）

一日。休日。正月に板木に飾った団子を煎って切りっこ餅にし、タバコ（一服おやつ）に食べた。切りっこ餅：乾燥させた餅をさいの目に切って大豆などと煎り、田んぼ仕事の携帯食として普段から食べた。

虫送り（ムシオクリ）

十日。笹竹の枝のつけ根数ヶ所に指先大の白餅をつけたものを、田んぼの一週に捧げてお祈りした。稲の苗の成長と病虫害の追放を祈願しえ行なわれた。

ノミの船（ノミノフネ）

十日。野性のイタドリ（通称ウマノスカンボ）の実（種）を採って神棚に供えた後座敷寝所に撒き散らした。これに蚤などの害虫が好んで入るとされ、きれいに掃き集めて川に流した。

早苗振り（サナブリ）

十五日。田植え作業の終了を祝って労をねぎらい、近隣の非農家や町場の縁者へ回し餅（マシモチ）をした。仙台地方全体でものど自慢大会など大々的な早苗振り行事が開催された。

神送り（カミオクリ）

二十日。稲の生育と病虫害追放から虫送り同様に笹竹に餅をつけ川戸（カド）先や田んぼに捧げた。

川戸：各戸が屋敷を取り巻く水路（堀）に設けた洗い場、鍋釜洗いから洗濯まで家の水仕事のほとんどがここで行なわれた生活の必需物

6.7 七月

七夕（タナバタ）

七日。竹飾りは数日前から家族全員で準備し、前日の六日から庭先に立った竹にはいろいろの願いごとを書いた短冊や巾着くず籠など、様々な工作物を飾った飾りつけが済むと、子供たちは近所の家々の飾りを見て歩く。当日は竹飾りの下に季節の物を供え、夕食もそこで楽しくいただいた。

またコモ草で二匹の馬を作り、馬小屋などの屋根の上に据えつけた。一匹には案内役の人形を乗せ、もう一匹はタナバタ様が乗るように何も乗せない。

お盆（オボン）

十四～十六日前日にお棚もの（季節の果物や野菜を吊したものを）を仏壇に飾り、十四日夕刻前、門口で迎え火を焚き、先祖の霊を迎える。十六日には同様に送り出し、集落ごとに盆踊りが催された。

6.8 八月

八朔餅祝（ハッサクノツイタチ）

一日（朔日）。休日。餅を食べる。

お名月様（オメイゲッツアン）

十五日。仲秋の明月豆月様（マメゲッツアン）夕刻から庭先にススキや萩などの草花を飾り、枝豆やぶどうなど季節の果物を供えて月を愛でた。

6.9 九月

菊の節句（キクノセック）

九日

十三夜様（ジュウサンヤサマ）

十三日。芋月様（イモゲッツアン）とも呼ぶ。豆月様と同様さつまいもを主として供えた。

ミョウジンワラ

十五日。稲を刈り、新しい藁で明神様（屋敷神）の屋根を葺く。各家庭ごとにモチ米で炊いた飯を新しい藁の上に載せて新しいモミをヤキ米にして仏壇に供える。

6.10 十月

お刈り上げ（オカリアゲ）

一日。休日。この日を基準として稲刈、稲揚げ、二オ積みまでの作業の終了を祝った。各農家で作業の終了した日の夕方、刈切り餅をどっさりついて重ね餅にする。翌日、親類縁者にお陰様の気持を込めてこれを配り、収穫の喜びを分かち合った。

荷縄はずし（ミナワハズシ）

荷縄とは稲を背負って自宅の庭先まで運ぶ際に使う縄のことである。実際に作業が終了した日に行なう。お互いの労を労い、餅をつき食べた。

6.11 十一月

油しめ（アブラシメ）

十五日。休日。餅を食べるこの日を基準に菜種、じゅうねん、胡麻、椿などを取り入れ、搾油を行なう時期。

庭払い（ニワバライ）

実施日は、各戸の農作業の状況により異なり、吉日に行なう。刈り取った稲は二オにして庭（敷地内）に積んで置くが、脱穀作業が進んで稲が全部籾になり、稲二オがなくなると、一年中の農作

業がすべて終了したとして、餅をついて祝った。なおこの後、春先まで折りに触れ、摺臼引きを行い、米にした。

谷地刈り（ヤチガリ）

谷地刈りとは、屋根に使う茅を刈って持ってくることである。茅葺き屋根は二十年くらい経つと、葺き替えをしなければならない。雪の降る前に茅を刈って貯蔵し、春先に使う。茅は一年刈らないと竹のように固くなるので、毎年刈る必要があった。

夜廻り（ヨマワリ）

通称、夜番といって旧十一月になると、青年団員が交代でボランティアで続けた。

松葉さらい（マツバサライ）

井土浜、藤塚、中野の海岸には松林が続いているが、ここの松葉はこの地区の人々にとって、貴重な燃料であった。毎年初雪が降って松葉が落ちた頃、営林署から「松葉さらい」の許可がおりてからさらった。

6.12 十二月

十二月水こぼし（ミズコボシ）

一日。切った豆腐を串に刺して炉端に立てる。その豆腐に火難災難にあわないようにと水がかけた。

煤掃き（ススハキ）

吉日を選んで行なう。草葺き屋根の屋内には炉やかまどの裸火による煤がびっしりと付着するので、新年を迎えるにあたり、一家全員で部署を決め、屋敷の畳を上げて屋内屋外すべての物品の清掃を行い、正月を迎える準備とした。

詰めの八日（ツメノヨウカ）

八日。休日。一年間の金銭（給金収支貸借）等の清算日。本来の師走。

追払い（ボッパライ）

二十日。休日。餅を食べる。各家の手間取り（雇人）の雇用が長引くと情が移り、加給などの出費を招くのでいったん雇用を区切る日としたが、それは形式上のことであった。

納豆寝せ（ナットウネセ）

二十五日。正月に食べる納豆ご飯は楽しみの一つ。その準備は煮た大豆をワラットコに入れ、ムシロやワラで包み温めて作る。「風引き」といって失敗もある。

餅つき（モチツキ）

二十八日。小正月前まで食べる量とお供え、それに町場の住む親戚の分まで、早朝より数臼もついた。また赤や青に色着けした団子を栗の木の太枝の取り付け、神棚、屋敷などの壁面に飾りつけた。翌年の米の収穫後（焼き払いの頃）まで置いて、その後は煎って食べた。昔はこれが不作の年の非常食ともなった。

注連縄（シメナワ）

二十七日。八日頃に注連縄を作る。必ず男の人がない、男の人がいない家は誰かに頼み、女の人には手をつけてはならないとされている。なう前には風呂に入って体を清め、服装も正してから縄になった。注連縄は火の神（オカマサマ）や屋敷井戸川戸（カド）に張った。

正月の松（ショウガツノマツ）

松飾りの松を「オンナマツ」という。オンナ松は葉が柔らかく短い。

年とり（トシトリ）

三十一日の午前中、屋敷周りを掃除整理し、午後主人は身を清め（入浴）、正月飾りを済ませる。日没前頃、正月様（飾り神）に山の幸海の幸のご馳走を供え、家族一同お祈りし、その後夕食をご馳走になった。年男の旦那（家長）は神様の膳を下げてください。

臼をふせる

三十一日。台所にムシロを敷き、一升舂に米とオフクデ（供餅）一個を入れて、その上に臼を伏せ、七五三にワラを下げた注連縄を廻す。臼に若水桶をのせておき、十四日に起こす。舂の米は七草の粥にする。

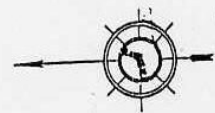
お年越し（オトシコシ）

三十一日～元日、年取り後の夜は長いので、年寄りや親たちが昔を振り返って話をするなどした。年越しそばを食べたところもあった。



名取市

1 : 22,000



六郷小学校学区全図

資料作成に際し参考にしたもの

今泉祐善寺第 14 世住職、立花睦恵さんから生前聞いた話、又 15 世住職、立花正宣さんが、旧六郷村役場員時代に書いたメモや『六郷村勢一班』『今泉沿革補則』他、地区内の古老から聞いていた話等を主に、作成したものです。

（佐竹 清造）

著者

佐竹清造（さたけせいぞう）氏 略歴

大正 15 年 8 月 13 日生まれ。

昭和 21 年 4 月 宮城今泉郵便局に勤務。

昭和 62 年 3 月 同 定年退職する。

平成元年 4 月 仙台市老壮園芸学園に入園、翌年卒園後「仙台市緑化相談員」に委嘱される。

平成 3 年 4 月 宮城「県文化財友の会会員」として、文化財講演会、歴史散歩等に参加、現在に至る。

若林区今泉在住

「六郷を探る会」参加者名（敬称略）

相原 正勝（上飯田）	阿部 政子（六 郷）
壺岐きみ子（上飯田）	井上 元史（上飯田）
大倉 利雄（今 泉）	鎌田 勝美（上飯田）
木村 久子（下飯田）	小久保敏雄（上飯田）
斉藤 恵子（今 泉）	佐々木和子（六 郷）
佐々木昭一（上飯田）	庄司 寿夫（井 土）
千田ミヨ子（今 泉）	平間 和子（上飯田）
武者 昭 （センター館長）	菅野美弥子（センター主事）
鹿野 恵子（センター社会教育指導員）	
武田 弘子（センター社会教育指導員）	市民センターだより

平成 12 年 4 月当時